

敢て獨斷的感想を陳ねた。著者の再度の教示を乞い願う。

なお本書の書評として、薄井俊二氏（九州大學中國哲學論集」第十三號、一九八七年十月）と大久保隆郎氏（『集刊東洋學』第五九號、一九八八年五月）のものが發表されている。あわせ参照されたい。

一九八六年一〇月 東京 研文出版

A 5版 三五三頁 七五〇〇圓

坂野正高著

中國近代化と馬建忠

林 要 三

本書は高名な中國近代外交史研究家としての著者が、一九七〇年代の初めから約十年間に逐次發表してきた馬建忠關係の論文に多少の補訂をくわえてまとめたもので、論文四編、解題付き翻譯一編とからなっている。

馬建忠はわが國ではよく知られているわりにはあまり研究がなされず、これまで中國近代外交史研究の一環として馬建忠の活動に言及されるか、あるいは洋務運動研究の一環としてその改革思想が取り上げられるにすぎなかった。

著者はこうした状況にたいし、近代化過程におけるプロフェシヨナルなわち専門家職業集團のもつ重要な意義に注目し、こうした問題關心から、「李鴻章幕下の有力なるサブ・リーダーの一人としての馬建忠の思想と行動と挫折の全體を一九世紀後半の中國の政治社會というコンテクストの中で包括的に跡づけること」により、『傳統主義的』な舊中國の政治・社會・經濟の苦澁にみちた變動の過程を明らかに」（五ページ）しようとした。こうした研究はこれまでだれも試みたものがなかった。本書は従來の類型化した馬建忠研究に新風を吹き込んだばかりか、今後のわが國の洋務運動研究、中國

近代史研究にも大きな刺激を與えるにちがいない。

二

さて、本書の構成は次の通りである。すなわち、

序 馬建忠はどのように研究されてきたか

一 フランス留學時代の馬建忠

——外交官および外交官制度についての二つの意見書
(一八七八年)を中心として——

二 海軍論

——一八八二年の意見書——

三 鐵道論

——一八七九年の二つの意見書——

四 インド紀行、『南行記』

——一八八一年、アヘン貿易漸減案打診の旅——

五 『擬說緒譯書院議』(一八九四年)

——解題と譯文——

あとがき

なお、論文の排列は、日本語による發表順となっている。

ところで、著者はなぜ馬建忠を研究対象にえらんだのか。著者によれば、そもそも馬建忠との出会いが、「李鴻章に仕えたサブ・リーダーズ、ないしは、中國の初期の在外使節として活動した人々を研究したい」と思っていたところ、「たまたままず彼に行き當った」(九一ページ)にすぎなかったようであるが、この著者を馬建忠研

究に驅り立てていったものは、彼の文集『適可齋記言記行』に収録されている「論說からほとぼしるリアリズムとシンニズムの魅力にとりつかれたから」(九一ページ)であったという。おそらく、著者は馬建忠個人の内面における合理主義の西歐と傳統主義中國の相克のなかに、一九世紀後半の中國政治社會の特質を照らしたそうとしたと思われる。

さて、著者は「序」において、内外の馬建忠研究、關聯文獻を網羅し、それぞれに簡潔なコメントをつけて紹介している。それはそのまま馬建忠研究にかんするすぐれた文獻解題であり、またすぐれた手引書ともなっている。著者は、また、各論中においても、中國近代外交史、海軍史、鐵道史等の分野における内外の代表的著作および史料集について、馬建忠にかんする言及があるかどうか、また馬建忠の論說や意見書が史料として収録されているかどうかを詳しく注記している。これらの注記を「序」の總括と合わせ讀むと、馬建忠研究史のおよそのアウトラインと現状を掴むことができ、また、本書の研究史に占める先驅的地位を知ることができる。

著者は内外の馬建忠研究を總括して、これまでの研究はかれの多面的な活動にもかかわらず、わずかに一、二の分野に限定されており、かれの活動の全體を對象としたものがない。しかも日中兩國の學界で比較的多く取り上げられてきた經濟思想の研究には、視點のマンネリ化がみられ、馬建忠の思想をその思惟構造の内面に立ち入って分析したものがなかったと述べている。

では、馬建忠研究にみられるこうした偏りはなにによるのか。著者は、中國近代史研究における種の問題意識の缺如によるものではないかとして、次のような重大な指摘をしている。すなわち、

「舊中國社會の變動ないしはいわゆる『近代化』を研究する場合に、専門家集團ないしはプロフェッションの成立ないしは創出といふことのもつ意味、および近代社會・近代國家における複雑な機構を運営するために必要とされる合理的な組織運営技術ともいふべきもののもつ意味が、とりわけわが國においては、これまでの中國史研究の枠組みの中では問題意識の外にあったといふことでもあろうか」(五五ページ)と。

本書は全編、著者のこうした問題意識に貫かれている。

三

ところで、本書は馬建忠の傳記的研究としてもすぐれている。馬建忠には專傳がなく、これまでは専ら次兄の『馬相伯先生年譜』に頼っていたが、本書はこうした状況を一變させた。著者はおよそ考えつくかぎりの史料を収集し、手堅い實證的手法を駆使して、傳記上の不明箇所を説明している。

著者の史料収集の努力により、新しい史料がいくつも發掘されている。一、二例を挙げれば、北京天主堂圖書室所藏の『馬氏族譜』(再引用)により、著者は、通説の生年を訂正しているし、また、フランスの歴史家コルディエ(Henri Cordier)の著作(*Histoire des relations de la Chine avec les puissances occidentales 1860—1900 Paris: Félix Alcan. 1901—1902*)により、馬建忠の洗禮名やフランス留學中および歸國後の行動についていくつかの新しい事實を明らかにするとともに、馬建忠の人間像をある程度まで説明している。コルディエ書は筆者未見であるが、コルディエと馬建忠は面識があったところから、これはまさに馬建忠研究の一等史料

である。

こうした文獻史料の収集のほか、著者はわざわざフランスにまで出かけて馬建忠留學中の史料を収集している。著者はフランスで入手した史料により、馬建忠が李鴻章にあてた報告内容をフランス語文獻で確かめたりえ、部分的な補充をしている。なお、この間の事情については、別著『イメージの萬華鏡』(筑摩書房一九八二年)に詳しく紹介されている。

この他、馬建忠と變法派との密接な關係を示す史料、死亡時の詳細な状況を示す史料等を、著者は細心の注意をもって、既刊書の中からさえもあらたに發掘している。本書により馬建忠の傳記的研究の水準は、飛躍的に高められた。傳記についてはまだ不明な點が多いと断わっているが、おそらく著者自身が自負している通り、馬建忠の傳記的研究において、本書の水準を超えるものは、今後當分の間現れないであらう。

著者は讀みにくい馬建忠の文章を讀みほぐすためにも大きな努力を割いている。馬建忠の文體は新桐城派の擬古文であり、譚嗣同の文章について難解とのことであるが、著者はこれをなめらかな日本語に翻譯している。そのため、『適可齋記言』は、初學者にとってもすいぶん讀み易いものになった。なお、著者は『適可齋記言』(梁啓超の序文附、一八九六年)に未收録の文章を『皇朝經世文新編續集』等から數編發掘している。著者の史料収集力には驚嘆のはかない。

著者はまた、清末の官制上の名稱や獨特な用語、さらには馬建忠に特有の用語なども現代的に分かりやすい譯語をあてている。漢語に翻譯された當時の外來語や外國人の名前には大變解り難いものが

あるが、著者はこれらを解明する工具書を提示しながら、譯語をあてている。ここに著者の、研究者としての厳しい姿勢と教育者としての暖かい配慮が感じられる。

四

各論の紹介にはいろいろ。

まず、第一論文で、馬建忠がフランス留學中に構想した外交官制度・外交官養成の問題が取り上げられる。

著者は馬建忠の生い立ちとフランス留學時代の勉學状況を簡単に紹介した後、馬建忠のヨーロッパ認識にふれ、かれはヨーロッパ外交史のながれを正確に理解し、バランス・オブ・パワーにもとづく世界政治の現實を正しく認識していたと、高く評價している。

馬建忠は、一八七八年に留學先のフランスから本國に二通の手紙を送っている。著者は最初の一通は「李鴻章の側近の諮問にこたえて、總理衙門の参考に供するため」の意見書であり、もう一通は「中國の實狀に合致した外交官養成所規則」（三四ページ）の構想を表明したものであるとしている。

さて、この手紙が書かれた前年には、『出使章程』が定められ、ロンドンに最初の在外公館が設立されている。翌年には、初代駐英佛公使郭嵩燾がパリに移り、馬建忠は勉學のかたわらかれの許で翻譯官を務めている。それはまさに中國外交官制度が發足したばかりの時期であった。

著者はこの手紙を論評して、それは「ヨーロッパにおける國際關係と外交の歴史的變遷を背景に描きながら、近代社會における外交使節は専門家として『使節になる才をもった人間』（使才）を『嚴

選』した上で、時間をかけて『養成』（教導）すべきことを強調したすこぶる注目にあたいる」ものであり、それらは「中國において『常駐専門外交官制度』の意義と必要性とを、おそらく最も早く、しかもきわめて明確に説き明かした先驅的論策として劃期的意味をもつものである」（二八ページ）と、高く評價している。

ついで、著者は第二信により馬建忠の八項にわたる外交官養成所規則の構想の紹介に移っている。その主な内容は、一、上海到北京同文館とは別に「出使學堂」を設立し、二、イギリスが中國に設立している領事翻譯學館にならってパリに「使署學館」を設立し、三、一五—二歳の「俊秀」を厳選して、四、前後六年間訓練する、というものであり、上海に設立する「出使學堂」の學生選抜方法および教育内容、「使署學館」での教育内容からこれらを運営する財源についての構想まで詳しく紹介している。

ところが、馬建忠の認識なり構想なりはきわめて優れたものであったとはいえ、著者によれば、當時は李鴻章にも總理衙門にも受け入れられず、ようやく人の注意を引くのは二〇世紀初頭であり、なにがしか定着するのは辛亥革命以後であるとしている。著者は同時代の日本の『外交官領事官制度』（原敬）との比較的考察を通じて、馬建忠の構想が失敗した原因を追求し中國における儒教教育のもつ重みを示唆している。

著者は馬建忠が外交官には實學が必要であると説きながら、同時に儒教的教養が政治の樞機に參畫するうえで必要であると説いている矛盾を指摘して、かれの思考の内面に立ち入って分析を試み、外交官に儒教的教養が必要であるとする考えが、はたして馬建忠の眞意であったのか、それとも當局者に自己の構想を受け入れ易くする

ための戦術だったのか、はたまた一八七〇年代の中國の現状がそうさせたのかと、問題を投げかけたまま最終的な結論は保留している。

第二論文では、海軍建軍と將兵養成の問題が取り上げられる。

馬建忠の海軍論は、歸國後まもなくの一八八二年に書かれたものであるが、中國において近代海軍の建設が現実的課題となった時代背景について、著者は一八七四年の日本の臺灣出兵が直接の衝撃となり、一八七九年の沖繩の廢藩置縣で拍車がかけられたことを挙げ、馬建忠個人に即しては、フランス留學時代から人間集團としての海軍の組織のありかたに興味をもっていたこと。歸國後は、ふた

たび李鴻章の幕下に入り「水師常務處道員」として、北洋海軍の建軍にかかわったこと。この過程で、馬建忠は舊式海軍旅順水師を視察して、つぶさにその腐敗ぶりを目撃していたこと、また、一八八二年の壬午の軍亂には、大院君を拉致して日本の動きを封じ、歐米諸國への朝鮮開國には、宗主國を代表して條約締結の交渉に深く關與して仲介の勞をとり、パワー・ポリティクスの渦中に身をおいていたことなどの経歴を紹介して、馬建忠が海軍問題について發言する十分な資格があったとしている。

著者は馬建忠の海軍論を紹介するにさいして、かれの基本的思想が、海軍の將兵を専門家として有用な人材とするには、外交官の場合と同様、少年時代から長年月の特別の訓練とそれにつづく持續的な實務體驗が必要であるとする點にあるとし、そのために提示される具體的な訓練計畫ないしは人事行政の方針のモデルにはフランスおよびその他の歐米諸國があげられ、このモデルに照らして中國の現状が痛烈に批判されているとしている。

ついで、翰林院侍講學士何如璋の一八八二年の奏文と李鴻章の諮問にたいする馬建忠の答申書を比較し、何如璋の立論の基礎が「列強の海軍力に中國が包圍されている國際環境」、「就中、日本における海軍の建設の進行状況を中國の安全保障に對する直接的な脅威」（六三一―六四ページ）とするところにあったのたいたし、馬建忠の立論の基礎は、「汽船の發明が中國の安全保障にとつての『海洋』のいわば政治地理的戰略的意義を一變させた」（六六ページ）とする認識であり、著者はこの點において、馬建忠の歴史認識が時代を大きく突き抜けていたとしている。

著者はさらにつづけて、馬建忠の答申書が何如璋の奏文の五倍半もの長文でありながら、何如璋の六項目中、「訓練」と「選拔」の二項に紙幅の六割を割くほど海軍將兵の養成、訓練問題に重點をおいていること、とりわけ海軍下士官を社會的にプロフェッションとして確立させることの必要性を強調していたことを評價し、そのために構想した海軍將兵養成五箇年計畫を紹介している。

著者は馬建忠が中國の軍人蔑視と人事行政の不公平を批判し、近代海軍の建設のためには、人事行政におけるコネの排除、黜陟賞罰の明確化を保證し、士官の格式を高め、兵卒に俸給の規定を知らせ、昇進の道を明かにすることが必要であると強調していることを挙げ、當時、張之洞がなお艦船に關心を集中させていたことと對比し、馬建忠の海軍論は比類ないものであったと高く評價している。

統一海軍の構想については、同時代の海軍論にみられる特徴であったとしながら、著者は馬建忠が分權的な「分省設防」の廢止、陸軍から獨立した海軍衙門の設立をあげていること、指揮系統の統一については、旗號の統一、北方音による號令の「定式化」、翻譯術

語の統一から大砲と彈丸の規格統一まで考えていたとし、さらに北洋艦隊の編成、將兵の訓練に要する財源問題についても、四項からなる財政改革を紹介している。著者は、馬建忠が豫想される保守派の反對論にたいして、ヨーロッパの財政制度と對比するかたちで、中國の財政制度の缺點を指摘し、海軍の財源を確保するためには、一切の制度の改革が必要であるとしていたという。

ところで周知の通り、馬建忠の提案した海軍衙門が統一海軍の建設にも、また官僚の腐敗防止にも役に立たず、北洋艦隊が日清戦争時に壊滅したことから、著者は、馬建忠の構想したプロフェクションが、なぜに清末社會に成立しなかったのかとの疑問を提起し、それは「中國の政治體制という大きな壁につき當つたのだということかもしれない」とし、馬建忠の血を吐くような言葉「能わざるに非るなり、これ爲さざるなり」（八五ページ）を引用して、これこそ挫折してもなお絶望しえない清末知識人の苦悶の聲であるとしている。しかし、馬建忠の海軍論の歴史的评价については、なお日本海軍との比較研究も必要にならうとしてこれを保留している。

第三論文では鐵道問題が取り上げられる。

ここでは馬建忠がフランス留學中の一八七九年に書いた鐵道問題にかんする二つの意見書が取り上げられる。著者はこの二つの意見書を「誰のために起草したのかをすばりと示すような資料に私はまだ行き當ってない」（九五ページ）としながら、これらが書かれた時代背景を次のように述べている。すなわち、國際的には、普佛戦争で鐵道がはじめて軍事戦略上重要な役割を果たしたこと。國內的には、李鴻章が國防の見地から鐵道の重要性を十分に認識しており、ロシアが露土戦争に、日本が西南戦争に忙殺されている今こそ

兵器を生産し、鐵道を敷設し、電信を架設すべきであり、しかも鐵道は自力で敷設したいと考えていたこと。しかし北京の首脳部が不決断であり、「學ある連中」の非難が豫想されるうえに、商人が出資に應じなかったこと等をあげ、李鴻章が一八七七年當時すでに駐フランス公使郭嵩燾との間に「函」（プライヴエート・レター）をやりとりして意見を交換していたこと、馬建忠が兩者の意見交換に深く関わっていたことなどを文獻的に明かにしている。ここには、李鴻章の従来とはちがったイメーシが示されて興味深い。

著者はこうした状況から、馬建忠の鐵道にかんする意見書、論説が鐵道導入反對論者を説得する理論的根拠を提供するために執筆されたと推測している。

ところで、著者は馬建忠が第一の意見書で、中國に鐵道敷設が可能であり、效用があるばかりか、猶豫できないとした理由を挙げたうえで、かれの鐵道敷設と運営方法を紹介しているが、鐵道の效用についての馬建忠の見解は、同時代の諸見解を集大成し系統化したものであり、鐵道敷設と運営についての見解は、今日では初步的な教科書の敘述にすぎないとしながらも、一八七九年時点では、中國の實務インテリにとってきわだって新鮮味があり、かつ具體的な調査報告書であったと高く評價している。

著者は、鐵道論に見られる馬建忠の思考的特徴に觸れ、かれの論説には「自國の政治社會の現状に對する絶望的というにちかい痛烈な批判、モデルたるべき歐米社會のマイナス面についてのシニカルな指摘」（一一七ページ）がみられること、かれの立場の基礎には、的確な事實認識、問題を歴史的文脈と國際政治の生きいきとした状況のなかに位置づける状況的思考とその上にたつ柔軟な政策論

の展開がみられるとし、とくに馬建忠が鐵道敷設にたいする反對論として當然豫想された風水説による反論と國內稅廢止にたいする地方官の抵抗の問題を捨象していることに着目し、かれの論鋒にみられる特徴を「悟性的抽象性」(一一七ページ)と規定している。

第二の意見書では、鐵道敷設の財源問題が取り上げられる。馬建忠は鐵道の運営は民營とし、資金は商人の出資と外國からの借款でまかない、政府は借款の保證をするだけと考えていたとし、借款の方法、注意點など、かれの見解を詳しく紹介している。著者は馬建忠が借款にたいし、當時、豫想しうるほとんどすべての問題を、周到に、系統的に、かつ徹底的に論じているとして驚嘆している。著者は馬建忠をきわめて優れた實務官僚であったと評價するとともに、鐵道借款の條件が明治の日本においても、中國においても過酷なものであったことを指摘して、馬建忠の樂觀的にすぎる見解は、意圖的なものか、知識の不足か、それともリスクにたいする鈍感さによるものかと疑問をだして、評價を保留している。

自力による鐵道敷設の成功例として、著者は詹天佑の京張鐵道敷設を挙げ、馬建忠が力説してやまなかった近代的な専門家集團の創出が、なぜ外交官や海軍將兵ではなく、他ならぬこの鐵道技師というプロフェッションにおいてまず結實したのかと發問し、今後の研究課題として、詹天佑の京張鐵道敷設に従事した中級、下級技師の出身、資質、學習能力、訓練狀況、外國人技師の役割等の分析を通じて、ある程度の厚みと廣がりのある鐵道技師の創出・形成を可能にした社會的諸條件、さらには詹天佑をして手腕を發揮させた政治的諸條件を明かにする必要があるとし、「探求さるべき問題はなお澤山あるように思われる」(一二〇ページ)と嘆息まじりの言葉で論

文をしめくくっている。

第四論文は、馬建忠のインド紀行「南行記」の紹介である。これは馬建忠がインドのアヘン事情を調査し、中國側のアヘン貿易遞減案實施の可能性を打診するために、李鴻章の非公式特使として、一八八一年インドのシラムに赴いた時の往復三箇月の日記體の記録である。著者は馬建忠のインド派遣が合法的アヘン貿易終焉に向かつての長い中英外交交渉の一駒と位置づけているが、ここでは、「南行記」の内容紹介にとどめている。

著者は馬建忠の「南行記」と同行者吳廣滯の「南行日記」とを照合せながら、同時にイギリス側の文獻とも突合せて、一行の旅程、道中の外國人との出会い、華僑との接觸、インド當局との會見の模様等を紹介している。華僑をめぐる人脈は、馬建忠の人脈を知らううえで興味深いものがある。また、「南行日記」から私人としての馬建忠の姿が窺えて興味深い。

馬建忠はイギリス側との一連の打診會談を終えた後、歸路ボンベイに立ち寄った折りに、ボンベイの町並みとその繁榮振りがロンドンに匹敵するのを見て驚き、「インドの民は日々富み、中國の民は日々貧しくなる」(一七八ページ)と嘆息しているが、著者はここに「ヨーロッパを直接に知っている中國の實務インテリ」馬建忠が「一箇月足らずのインド滞在で何を考え、どこに目をつけ、そして何を感じたかを鋭く示している」(一七八ページ)としている。

最後の編は「擬設繙譯書院議」の解題付き翻譯である。この計畫書が書かれた一八九四年といえ、馬建忠は合理的なアントワールブルヌールであるがゆえに盛宣懷から嫌われ、晩年は資金源にたいする意見の相違から李鴻章からも退けられて、上海に盤居し、『馬

『氏文通』を編纂していた頃のことである。著者は解題で馬建忠の傳記を簡單にふりかえりながら、この計畫書が書かれた時代背景として、「中國と西洋との雙方における筆者の多彩な學習と生活の體驗と中國の官界における失意と挫折を背景として書かれ」たもので、「中國と西洋という異質の文化が衝突しあう場で苦闘しつづけたおのれの生涯を馬建忠がそれとなく總括してみせているおもむきがある」(一八八ページ)としているが、執筆の目的については、「誰か要路の大官に讀ませるため書いたものなのか、それとも、いわば單に識者に訴えようとしたものなのか」、「あるいは彼自身を『監理』(校長)兼『洋文教習』たるべき適任者として擬していたのかもしれない」(一八九ページ)などと推測するにとどめている。

この計畫書の内容は、中國に翻譯事業を起こす必要性から説きおこし、ついでそのための人材養成の必要性、翻譯書院設立の目的、書院の運営機構、財政管理の方法におよび、さらに「同文字典」の編纂、翻譯すべき文獻、圖書館、印刷所の設計、書院設置場所等、じつに周到に計畫されているが、本文の紹介は省略する。

五

以上、各論文の内容を紹介してきた。本書は著者の斬新な問題關心により、從來にないユニークな馬建忠研究、中國近代史研究となっている。しかしその反面、本書の射程に入りきらなかった問題も残されている。また、アントゥルブルヌールとしての馬建忠については、なん度か言及しながら、ついに正面きつて「富民説」を取り上げなかったのは、まことに残念である。

著者は馬建忠を「洋務論の域をつきぬけた」「かなりにいわば進

歩的」(四ページ)改良主義者と高く評價しているが、馬建忠の専門家職業集團の創出、養成の青寫眞についての歴史的評價にはきわめて慎重であり、今後解明を要する多くの課題を示唆するにとどめている。この課題を解明するには、著者の力量をもってしても、なお「氣が遠くなるほど難澁な作業を必要とする」ものと意識されていたが、著者はついにそのための時間的餘裕をもたなかった。

不幸なことに、著者は本書出版後まもなく死去された。ここに、故人の冥福を心からお祈りするとともに若い世代の研究者が著者の遺業を引き継いでくれるよう期待してやまない。

本書は二〇四ページのコンパクトなものであるが、馬建忠にかんする最初の專著であり、中國近代史あるいは洋務運動のいわば社會史的研究ともいふべきあたらしい分野を切り拓いた傑作であり、中國近代史研究の枠組みの咒縛にたいする衝撃的な作品である。本書を中國近代史の研究に従事するすべての人たちにお薦めしたい。

一九八五年二月 東京大學出版會
B6版 二〇四頁 二六〇〇圓